

芭蕉元禄事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十九年十月度 入選句（投稿総数二千八百九十六句・小中学投句数二千三百十四句）

特選

選者 高木 恵理

さくらもみじつきぬけている川燈台 大垣市 米山 恵弥(小六)

「さくらもみじ」というのは、色づいた桜の葉のことですね。秋になり桜の葉がばらばらと落ちていきます。残った葉が茶色や黄色にうつすらと色付いているのですね。そこに、川を照らす黒い川燈台が建っています。「つきぬけている」という言葉が、川燈台をさらに鮮明に浮かび上がらせた見事な俳句です。

秋晴れにみなもにうつる赤い橋 大垣市 野村 勇輔(小六)

上五の「秋晴れ」という言葉で、読者の視点は晴れ上がった高い空に向けられます。続く中七の言葉「みなもにうつる」で、視点が下にうつります。読者は、秋の澄み切った川を想像したことでしょう。そこに映る赤い橋。なんと美しい風景でしょう。空の「青」と橋の「赤」の対比が見事です。

秋の風まけるもんかとはしりだす 大垣市 杉野 瑞季(小四)

「春の風」とは違い、「秋の風」ですね。秋の初めはまだ残暑を伴う風ですが、次第にさわやかになり、秋の終わりには冷気を伴う風になります。作者はきつと、秋の終わりの冷たくなった風で詠んだのでしょうか。冷たい風にも負けず、何かに立ち向かっていく作者の強い気持ちが感じられます。

秀逸

山々がきりの奥へと消えていく 美濃加茂市 坂井 厚志(中三)

体育祭ハチマキの跡がのこってる 美濃加茂市 前川 怜香(中三)

秋の川さくらもみじのかざりつけ 大垣市 木村 諒堵(小六)

秋の風静かにゆれてお話中 大垣市 戸田 優衣(小六)

どんぐりさん風にゆられておひっこし 大垣市 中川 あき(小二)

れんしゅうのせいかがでずに運動会 大垣市 加藤 たくま(小四)

どんぐりを両手に抱え夢いっばい 大垣市 佐竹 美仁(小六)

リンリンリン夜は虫たちこもり歌 大垣市 澤 美玖(小六)

赤とんぼならんでとぶよかぞくかな 大垣市 浅井 良介(小二)

お月さんぼくのほうみてにっこにこ 大垣市 柘植 結吏(小二)

入選

紫に赤に黄色にうまい秋 美濃加茂市 上村 晴輝(中三)
 生徒より先生熱い体育祭 美濃加茂市 安江 浩睦(中三)
 見あげれば飛行機雲と秋の空 美濃加茂市 片田 雄大(中三)
 露ひとつ葉からこぼれて散っていた 美濃加茂市 永原 愛海(中三)
 白馬ににんじんあげる多度大社 大垣市 長澤 麻未(小四)
 もやい船紅葉乗せて休けい中 大垣市 金 慧延(小六)
 もやい船木の葉が屋根を染めていく 大垣市 小森 彩水(小六)
 台風で窓がガタガタ犬ほえる 大垣市 鈴木 歩美(小六)
 たのしみはママのおにぎりうんどう会 大垣市 河本 瑛誠(小二)
 たい風がこわくてねれないねぶそくだ 大垣市 仙石 柑奈(小二)

入選

赤くなりてれているのかもみじの葉 大垣市 成瀬 優斗(小四)
 いちようの葉だれが落ちるのがまんだね 大垣市 藤原 あかり(小六)
 お月さま雲にかくれてかくれんぼ 大垣市 近藤 克哉(小六)
 家の庭コスモスさいてはなやかに 大垣市 渡部 結衣(小六)
 くりがおちとげの中にはまほうの実 大垣市 杉原 諒(小六)
 まっかつかりんごのからだおこりんぼ 大垣市 山田りゅうのすけ(小二)
 どんぐりがころころまわる目がまわる 大垣市 近藤 安人(小二)
 どんぐりがぼうしをかぶっておちてきた 大垣市 立川 由奈(小二)
 あかとんぼつかめそうでもつかめない 大垣市 稲川 紗佑里(小二)
 よるになるきれいなつきをじつとみる 大垣市 成瀬 謙伸(小三)

選者吟

残る虫北極星を向いて鳴き

恵理